

「Sさん」のこと

野瀬 隆平

入社して配属されたのは、東京にある造船所だった。

船の商売に係わるのであれば、先ずは商品を良く理解しておかねばならぬと、現場の営業に配属されたのである。

工場ではインドネシアやロシアあるいはギリシャに輸出する船を建造していた。従って、営業には英語は勿論のこと、インドネシア語やロシア語、さらにはポルトガル語に堪能で経験豊富な人たちが揃っている。

仕事のイロハから社会人として身に付けるべき基本的なことを、こんな人たちに教えてもらった。担当した船がインドネシア向けであったこともあり、新入社員教育の役割の担ってくれたのはインドネシア語も話せるSさんであった。

入社して何年か後にギリシャ船主との交渉のためギリシャに出張した。アテネの近くにあるピレウスという港町に、多くの船主が事務所を構えているので、我が社もその町に事務所を置いている。この事務所の所長をしていたのが、Sさんであった。一日の仕事が終わって、Sさんの自宅に招かれ奥様の手料理をごちそうになり、マージャンをしたことを懐かしく思い出す。

私の最後の任地、シンガポールはSさんがかつて事務所長をしていたこともある場所である。

退職後、当ペンクラブに入会した時に、その名簿を見て驚いた。なんとSさんの名前があるではないか。

Sさんとは荘司忠司さんである。彼には3人の立派な息子さんが居られるが、海外勤務の間も、日本人学校ではなく現地校に通わせていた。国際的に通用する人間に育てたいとの考えからである。その結果か、息子さんの一人はアメリカで活躍されており、彼もアメリカで一緒に生活していた。それ故に、クラブの会員だが日本での会合にはあまり出ていなかった。

その荘司さんが、米国から一時帰国して当クラブの会合に出席された。たしか2005年頃だったと思うが、新日鉄の代々木研修センターでのアフターファイブに、こちらに近づいて、声をかけてくれた。

「何だ、お前こんなところに居たのか」

注：荘司氏の著書 『息子たちは「脱帰国子女」』1994年出版